

信濃川学識者会議 第1回上流部会 議事要旨

開催日時：平成20年9月30日（火）10:00～12:00

場所：ウェルシティーNAGANO 2階 会議室「樹林」

- 議事次第：1. 開会
2. 挨拶
3. 委員の紹介
4. 信濃川水系学識者会議について
5. 部会長選出
6. 議事
① 「上流部会で議論して頂く事項」の説明
② 千曲川・犀川の現状と課題
7. 閉会

○部会長選出

規約第3条第4項に基づき、上流部会長に、富所五郎 信州大学名誉教授を選出した。

○議事

- ① 「上流部会で議論して頂く事項」の説明
② 千曲川・犀川の現状と課題

(A委員)

- 信濃川水系の国管理区間には、中抜けの区間がある。今日の話の中には含まれていないと思うが、県管理区間についてはどのように理解したらいいのか。直轄に変更、あるいは地方分権といった議論があるが、一級河川は直轄がいいのではないかと感じている。その点についてこの会議の中では話題になるのかどうか聞かせていただきたい。

(事務局)

- 上流部会では、現時点では千曲川河川事務所及び大町ダム管理事務所の管理区間を考えている。県管理区間については、県が策定することとされているので、調整を図りつつ検討を進めていきたい。また諸般の事情により変更があった場合には別途説明させて頂きたい。

(B委員)

- 2000年までサケの稚魚を放流する事業が長野県で行われてきた。21年間行われて約900万匹放流したが、上がってきたのは70匹だけであった。それは、減水区間があるからである。上流部会では長野県と新潟県の境の県管理区間は議論の対象外となっているが、この点については整備計画の中でどのように位置づけられるのか。新しい河川法では、治水・利水に加えて河川環境を重視している。その視点からも、サケが遡上できる信濃

川が望まれる。

(事務局)

- 減水区間は主に県の管理区間にあるが、水利権については信濃川河川事務所で許可を出しているので、意見については全体会議に報告する。
- 現在、信濃川河川事務所で、JR、東京電力の減水区間について、学識者、沿川の自治体、利水者からなる協議会を設置し、どのように改善すればよいかが議論されており、サケの遡上期に放流量を増やす取り組みも行っている。

(C委員)

- 千曲川河川事務所の管理区間ではないが、佐久平の県管理区間にも流れ込み式の発電所があって、6割ぐらいが減水区間になっている。この部会に直接関係する課題ではないが、河川の正常な機能の維持に関する課題の一つだと考えられる。

(事務局)

- 環境への配慮は重要な課題だと考えている。非常に難しい課題であるが、検討していきたいと考えている。

(D委員)

- 河川の管理に関しては、「安全、安心」に関する課題と、「河川利用」に関する課題があり、2つの課題は分けて考える必要がある。
- 安全、安心に関しては、立ヶ花狭窄部をなんとかしていただきたい。立ヶ花の課題は下流の無堤地区、県管理区間更には新潟県側に影響があることから難しい課題であるが、何とかしなければならない課題である。新潟にも出かけていって早く対応してほしい旨お願いをしている。そのためには、まずは堤防を強化していただきたい。
- 地方分権の議論は承知しているが、中抜け部分の県区間について、これを一括して国で管理していただきたい。
- 平成 18 年の洪水時には利水ダムによる流量調節も行われたと聞いている。安全・安心については技術論だと思うが、お金をかけてしっかりやっていただきたい。
- 利用の面では地方自治体として重要な課題と思っている。特に千曲川下流域などは非常にその恩恵を受けていると思っているが、まだ利用できる空間が残っている。それをどのように有効に使うかがポイントである。アレチウリ、ニセアカシアの繁茂により足の踏み場も無いような所もある。そういう所をスポーツ関係や親水公園といったものをつくることによって、河川を整備・管理する方法もある。また、そういったことを民間にやっていただくのも1つの方法と考えられる。

(事務局)

- 堤防の整備については、安全・安心の確保ということで、われわれも進めていきたいと考えている。
- 利用についても、非常に大事な観点と考えており、ご意見をいただいて、どんどん使えるかたちにしていきたいと考えている。

(D委員)

- 千曲川の一番上流に、ダムの計画があったが、とり止めとなったと聞いている。安全安心の観点で影響がなかったが疑問である。

(事務局)

- 上流ダムについては、平成14年頃に当時の河川局長が国会の答弁で、「白紙」だという話をした。
- 基本方針では1/100の流れを対象に計画流量が決定されているが、整備計画では今後30年間の目標をどのように設定し、何を整備するかということについてお示していくことが必要だと考えている。

(E委員)

- 狭窄部については飯山も同じであるが、この課題をどう解決するのか。
- 特に昨今、地球温暖化の影響についても課題視されている。長期的視野に立ってこのような課題をどう考えていくのかをお示しいただきたい。

(事務局)

- 現状は無堤区間が存在している状況であり、まずは堤防整備を優先していきたい。続いて河道掘削が必要となるが、その際は上下流のバランスを考慮する必要がある。

(F委員)

- 立ヶ花に関しては、もともと氾濫していた場所の周りに家が建ち、自由に氾濫していたのを流路を固定したため、トラブルスポットになったように見える。地形形状はどのようになっているのか。

(事務局)

- 立ヶ花狭窄部は、洪水や地殻変動等の影響を受け、現在の位置に川ができあがっている。狭窄部では上流が氾濫するため、それを守る目的で、古くから必要な場所に堤防が整備されている。近代になり連続堤が整備されるようになり、その結果、現在の河道ができあがったものと考えられる。

(F委員)

- 危ないところは強固な堤防で整備しなければならないことはわかるが、上流の洪水調節施設の計画が変わればかさ上げが必要となる。長いスパンで見ると同じ事の繰り返しになるのではないか。

(事務局)

- 整備計画のスパンは概ね30年を予定しており、今後30年間でどういう川づくりをしていくかを定めるものである。戦後起きた一番大きな洪水に対して再度被害に遭わないような整備が必要と考えている。
- 整備メニューについては、意見を頂きたい。

(G委員)

- 環境保全のバロメータとして生物の状況が引き合いに出されるが、アユやウナギは長野

県下では野生絶滅の状況にある。アユを含める回遊魚を復活させるためには流域全体を通した視野が必要かと思われるが、たとえばサケを復活させるといったビジョンまでを含めて考えていっていいのかどうかということを伺いたい。

(事務局)

- 難しい課題であるが、意見については、全体会議に上げさせていただく。

(H委員)

- 狭窄部という大きな課題がある事は聞いているが、上流部にも大きな課題がたくさんあると思っている。30年というスパンの中で予算がどれだけ付き、どれだけ整備できるのか。整備の優先順位を決める上で一番大きな課題は、ここだということをもう一度教えていただきたい。
- 上流部では完成堤防が非常に少ない状況にあり、不安がある。犀川上流域では河床低下の課題も悩み。取水困難な状況が発生し、大きな課題となっている。湧水を利用するワサビが地域の特産となっているが、河床低下により従来のような地下水が無くなってしまふ。

(事務局)

- 委員から優先順位の話がありましたが、そこはまさにここで議論していただきたい。
- 無堤地区への築堤が優先など方向性は事務局として持っているが、各地域でいろいろと思入れがあるため、優先順位の課題という部分は、委員の皆様のお知恵を拝借したい。
- たとえば立ヶ花は非常に大事なところだということは考えているが、たとえば湧水、ワサビ田のところも当然認識はしているので配慮はしていきたいと考えている。

(部会長)

- 河床の低下、上昇に関する資料を次回に示していただきたい。

(事務局)

- 了解した。

(A委員)

- ワンドを造って頂いたり、公園を造ったりしているが、川の流れは複雑でワンドが埋まるなど課題が発生している。そのような課題についてどのように検討されているのか説明願いたい。

(事務局)

- 生態系を保全する目的で多自然川づくりに取り組んでおり、水際から生態系の連続性を確保する手法として各種工法を採用している。
- 外来種が課題となっているが、たとえばアレチウリやニセアカシアの課題は砂利採取等による低水路の河床低下と高水敷の陸地化が大きな原因であることが分かってきている。
- 河川生態学術研究会で検討を行っている、たとえば河道掘削するときにはどのように切ったらアレチウリやハリエンジュなどが発生してこないということも、いろいろな研究

でわかってきている。生態系に配慮しつつ、なおかつ治水上も安全が確保できるような研究を、現在進めているところである。

(F 委員)

- 河床低下もあるが、局所的に河床が上昇している所もあると思う。砂防を専門としている関係上、土砂の流出、礫径、摩耗といった観点で考えてしまう。土砂供給がなければ急流河川では掃流力が大きく、河床低下は当たり前と思うが、そういう河川に通常の河川堤防で対応可能か。また、土砂のコントロールをこの中で考えるのかどうかを伺いたい。

(事務局)

- 実際に整備メニューの中で、土砂コントロールまでを考慮したメニューが出せるかは難しいかもしれないが、流域総合土砂管理といった視点で調査、研究を進めている事務所もある。

(部会長)

- 土砂コントロールについては、基本方針の検討の際、委員長の強い要請で入れることになった項目である。

(I 委員)

- 整備計画は、30年のスパンということであるが、目標流量の途中変更というのは基本的にはないのか。

(事務局)

- 流量については、いま考えているのは、戦後の洪水での最大規模、具体的に言うと昭和58年ぐらいがそれに近いが、それを目指していこうと考えている。
- メニューについては、30年の中でできるものを拾い上げていくというかたちで、目標が完全に達成できるかどうかは難しい議論である。

(I 委員)

- 地域の住民が安心して生活できる環境をつくることは重要なことである。最近、ゲリラ的な豪雨もあり、地域の住民が既設利水ダム of 治水利用について、検討をしていく必要があるのではないか。
- 築堤をしてもらえばいいが、堤防はすぐにはできないので、河川の安全度を上げるために貯水池等を設置する計画をしてもらえれば安心して生活できる。

(事務局)

- 平成18年の洪水の際は、事務所や地域が協議、調整をして、各利水者にお願いする形で対応を行っている。これは、制度上行っているものではなく、今日までの協力関係を築いてきたことによってできるようになったものだろうと考えている。
- 貯水池については、ご意見を伺いながら、どのような施策を講じていくかということを議論していただくことになろうかと考えている。
- 30年というスパンを考えた場合、新たにダムをつくることは整備メニュー的に入ってこないと考えられるので、まずは河道整備を優先したいと考えている。

(J 委員)

- 課題の中で最後のほうに出ている河川利用や地域連携という項目について、これから環境保全などいろいろな意味で必要になってくる課題であり、今後考えていきたいと考えている。
- ボランティアサポートプログラムというのは、働きかけてこのような団体をつくっているのか。

(事務局)

- 地域連携については、積極的に推進していきたい。
- ボランティアサポートは、もともと地域で活動しておられる団体を国も支援していこうという制度である。

(部会長)

- 犀川については治水ダムだけではなく、大きな電力ダムが多く、緊急時の対応により効果を発揮することが期待される。それに対し、千曲川については、大きなダムがほとんどなく、両河川のアンバランスが非常に激しいと思う。
- 昭和 58 年の洪水を当面の目標とするのはいいが、それ以上の洪水が起こらないとは限らないので、そういうことを念頭において整備計画も立てなければいけないのではないかと思う。

(C 委員)

- 千曲川の河川事務所は、過去から非常に優れた刊行物をつくっておられるので、ぜひこの機会に住民の皆さんに、知識の共有のために役立つような、千曲川の特徴を大いに加味した川の読本みたいなものをつくっていただけるとありがたい。

(K 委員)

- 生態学術研究に関しては、冠水頻度を考えて高さをきちんと計算した上で掘削すると、ただ自然破壊になるということではなく、外来種を排除出来たり、あるいはそこに水辺の植生が復活してくる。掘削する高さなどを考えることで、自然破壊ではなく、積極的な環境創出ができるのではないかと思う。
- ニセアカシアについては養蜂家が利用するなどしており、害だけとは考えられないため、場所はパッチ状に残すなど、やり方は考えられるので、次回以降、議論できればと思う。

(L 委員)

- 「千曲川」の名を冠している千曲市では、市全体の中で河川が占める割合は大きい。いかに市民が多く利用できるものにするかが重要と考える。狭窄部の課題については、上下流のバランスが必要との中で、方法論を考える必要があるものと感じた。